

2016/03/29

留学のインパクトに関する文献解題

新見有紀子（一橋大学）

1. 留学のインパクトに関する大規模な調査

- 1-1. Paige, R. M., Fry, G. W., Stallman, E. M., Josić, J., & Jon, J.-E. (2009). Study abroad for global engagement: the long-term impact of mobility experiences. *Intercultural Education*, 20(sup1), S29–S44. など

留学経験の長期的なインパクトに焦点を当てた大規模な調査の一つとして、「グローバル・エンゲージメント（国際社会貢献）のための留学（Study Abroad for Global Engagement (SAGE)）」がある。本プロジェクトでは、留学が留学経験者個人だけではなく、社会全体へ与える波及効果を探求するため「市民としての行動（Civic engagement）」、「知の創造（Knowledge production）」、「フィランソロピー（Philanthropy）」、「社会起業（Social entrepreneurship）」、「自主的な質素儉約（Voluntary simplicity）」の5つのグローバル・エンゲージメントの側面における留学経験のインパクトと、留学経験者の進学やキャリア選択への影響について調査を行った。米国内の20大学で留学経験者6,378名に対して、質問票調査を2007-2008年に実施し、また、留学経験者63名に対するインタビュー調査および複数のケーススタディも実施された。その結果、留学経験は、学部時代の様々な経験の中で、人生に最もインパクトを与えた経験であると回答した人が一番多かった。さらに、留学経験は、「自主的な質素儉約（Voluntary simplicity）」の意識を高め、留学後の進学・キャリア選択を通じて、人生にわたる長期的な影響を与えることが明らかになった。ただし、質問票調査を実施した20大学のうち14大学では、2009年秋に留学未経験者（対照群）5,924名にも質問票によるデータ収集を行ったが、経験者と未経験者の比較分析は実施されていない。本プロジェクトは、調査規模の大きさという点でも重要ではあるが、留学経験が社会に与える波及効果について議論したパイオニア的な調査としても意義深い。

- 1-2. Murphy, D., Sahakyan, N., Yong-Yi, D., & Magnan, S. S. (2014). The impact of study abroad on the global engagement of university graduates. *Frontiers: The*

Interdisciplinary Journal of Study Abroad, 24, 1–24.

前述の SAGE Study で対照群を用いた比較分析が欠如していたことを指摘し、ウィスコンシン大学マディソン校の留学プログラム参加者と、留学未経験者を対象に、SAGE と同様のグローバル・エンゲージメントについての 5 領域におけるインパクトについて調査を実施した。また、本調査独自の質問項目として、留学後に国際関連の趣味や余暇活動（海外映画の鑑賞、海外のウェブサイト閲覧、海外料理の飲食、海外旅行、海外からの訪問者のホスト、海外の新聞や雑誌などの購読など）も調査した。調査対象者 (N=1,283) のうち、留学経験者 270 名、留学未経験者が 1,013 だった。その結果、「市民としての行動 (Civic engagement)」および「自主的な質素儉約 (Voluntary simplicity)」については、留学経験者の方が、未経験者よりもインパクトを実感していた。ただし、「フィランソロピー (Philanthropy)」については、経験者・未経験者での自己評価結果の高低が混在し、「知の創造 (Knowledge production)」と「社会起業 (Social entrepreneurship)」に関しては、経験者・未経験者での違いは見出されなかった。国際関連の趣味や余暇活動を行っているかについては、概ね、留学経験者の方が未経験者よりも高いと回答する傾向が示された。

1-3. O'Rear, I., Sutton, R. C., & Rubin, D. L. (2011). The effect of study abroad on college completion in a public university system. など

GLOSSARI (Georgia Learning Outcomes of Students Studying Abroad Research Initiative) と呼ばれるプロジェクトも、留学のインパクトに関する大規模な調査の一つである。The University of Georgia システムの 16 大学のデータを用いて、2000 年秋から 10 年間に渡って行われた。GLOSSARI は 6 つのフェーズで構成されていた。フェーズ 1 では、異文化や世界に関する知識について、留学経験者 255 名、留学未経験者 249 に対して、自己評価に基づく質問票調査を実施。その結果、分野ごとに異なるものの、留学経験者の方が未経験者よりも、異文化や世界に関する知識を持っていると高く自己評価していたことが示された。フェーズ 4 では、留学経験者 19,109 名と、留学未経験者 17,903 について、入学時の SAT のレンジごとに、留学経験者と未経験者の卒業率、GPA 向上を比較した。その結果、留学経験者の方が、未経験者よりも卒業率が高かった。また、SAT

のレンジごとに異なるものの、留学経験者の方が未経験者よりも留学後の GPA の伸びが大きかった。フェーズ 6 では、留学のキャリアに関する長期的インパクトを調査する予定であったがスケジュールなどの都合上、中止となっている。

- 1-4. Vande Berg, M., Connor-Linton, J., & Paige, R. M. (2009). The Georgetown Consortium project: Interventions for student learning abroad. *Frontiers: The Interdisciplinary Journal of Study Abroad*, 18, 1-75. など

留学のインパクトについての大規模な調査の一つに、The Georgetown Consortium Project もある。本稿では、同じ海外留学プロバイダーを用いて留学した米国内の 190 の大学に所属する学生 1,297 名（うち、留学経験者 1,159 名、留学未経験者 138 名）を対象に、外国語運用能力と異文化センシティビティの変化に焦点を当て、2003 年から 3 年間にデータ収集を行った。アセスメントツールとして、The Simulated Oral Proficiency Interview (SOPI) と The Intercultural Development Inventory (IDI) を用いて、それぞれプレ・ポストテストとして実施した。その結果、留学経験者の方が未経験者よりも、第二外国語の会話能力と、異文化センシティビティの両方において、向上がみられた。また、留学経験者のうち、女性の方が男性よりも会話能力と異文化センシティビティの両面においてよりスコアが向上したことも明らかになった。

- 1-5. Chieffo, L., & Griffiths, L. (2004). Large-scale assessment of student attitudes after a short-term study abroad program. *Frontiers: The Interdisciplinary Journal of Study Abroad*, 10, 165-177.

短期留学のインパクトに関する大規模な調査の一つとして、本稿では、5 週間の短期留学への参加経験が、カルチュラルアウェアネス（異文化への気づき、個人的な成長、地球規模の相互依存への気づき、世界の地理や言語に関する知識）に与える影響を検証した。短期海外留学参加学生 1,509 名と、米国内で類似の授業を受講した学生の 827 名に対して、カルチュラルアウェアネスの向上に関する自己評価に基づく質問票調査を行い、2 つのグループの結果を比較した。その結果、カルチュラルアウェアネスに関する多くの項目において、短期留学への参加者の自己評価は、国内学習者の自己評価よりも高い数値だった。このこと

から、1ヶ月という短期留学であっても、その効果として、参加した学生の文化意識の向上や個人的な成長への実感につながることを示された。

- 1-6. Kurt, M. R., Olitsky, N. H., & Geis, P. (2013). Assessing global awareness over short-term study abroad sequence: A factor analysis. *Frontiers: The Interdisciplinary Journal of Study Abroad*, 23, 22–41.

短期留学のインパクトに関する別の調査として、本稿では、Elon Universityにて3-4週間の短期留学プログラムに参加した学生に、1学期間の留学前準備授業の開始時と、留学開始時、留学終了後の計3回、自己評価に基づく質問票調査を実施し、留学準備授業と留学経験自体が「グローバルアウェアネス」にどのような影響を与えるか検証を行った。調査参加者は、2011年秋の学生607名と、2012年冬の学生589名のうち、途中で調査から外れた18名を除く、計1,178名に対して行われた。「グローバルアウェアネス」のスコアの変化を比較するにあたり、社会経済的地位や過去の海外留学経験なども変数とした。「グローバルアウェアネス」について探索的因子分析を実施し、「一般的なアウェアネス」、「実用的な知識」、「海外のメディアとの接触」、「コミュニケーションと文化」、「外国語との接触」の5つの要素として抽出した。調査の結果、「グローバルアウェアネス」の5つの領域のうち、「一般的なアウェアネス」「実用的な知識」「海外のメディアとの接触」の3領域において短期留学への参加は肯定的なインパクトを与えており、中でも、「実用的な知識」についての伸びが特に大きかった。また、過去の留学経験が「実用的な知識」の伸びと関連していることも示された。一方で、本稿では、留学準備授業は「グローバルアウェアネス」を高めるのに直接の効果が無いということが示されたが、事前研修の効果についてはさらに検証が必要であるとしている。

- 1-7. Dwyer, M. M. (2004). More is better: The impact of study abroad program duration. *Frontiers: The Interdisciplinary Journal of Study Abroad*, 10, 151–163.

米国の留学プログラムのプロバイダーであるIESは、1950年から1999年の50年間にIESの留学プログラムに参加した留学経験者に対して、2002年に質問票調査を行い、3,723名から回答を得た。IESの関係者は、調査対象者の留学プロ

プログラムの特性と、留学後のインパクトについて、本データを用いて、複数の異なった論文やレポートを公表している。本稿では、留学期間（1年、1 Semester、夏学期）の違いによって留学のインパクトにどのような違いが見られるのかを検証し、より長期的な留学の方が、学術面での達成、現地の人たちとのコミュニケーションなど様々な分野におけるインパクトがより強いことを明らかにした。このほか、留学プログラム内の要素（直接入学、ハイブリッド、インターンシップへの参加、ホストファミリープログラムの参加、留学期間）の違い（Norris & Dwyer, 2005）や、プログラムの特性と留学参加者の参加年代ごとのインパクトの違い（Dwyer & Peters, 2004 など）、キャリアに関する長期的なインパクト（Norris & Gillespie, 2009 など）についても、論文誌や、留学関係の情報誌、学会などで発表している。

（IES による関連文献）

- ・ Norris, E. M., & Dwyer, M. M. (2005). Testing assumptions: The impact of two study abroad program models. *Frontiers: The Interdisciplinary Journal of Study Abroad*, 11, 121–142.
- ・ Dwyer, M. M., & Peters, C. K. (2004). The benefits of study abroad: New study confirms significant gains. *Transitions Abroad*, (March/April), 56–57.
- ・ Norris, E. M., & Gillespie, J. (2009). How study abroad shapes global careers: Evidence from the United States. *Journal of Studies in International Education*, 13(3), 382–397.

2. 様々なアセスメントツールを用いた調査

- 2-1. Enge, L., & Enge, J. (2004). Assessing language acquisition and intercultural sensitivity development in relation to study abroad program design. *Frontiers: The Interdisciplinary Journal of Study Abroad*, 10, 219–236.

本稿では、2000年から2004年までの間に米国の某大学からフランスに1 Semesterまたは1年間留学した学生に対して、フランス語の運用能力テスト（TEF）と、Intercultural Development Inventory（IDI）を複数回課し、そのスコアの変化について分析した。具体的には、1 Semesterの留学者257名に実施したTEFのスコアは、留学前と比べて37%上昇し、187名に実施したIDIのスコアは33%上昇していた。1年間留学した学生32名に実施したTEFのスコアは45%の上昇

が見られたが、1 セメスター終了後の時点での伸び (41%) の方が、2 セメスター目終了時 (17%) よりも大きかった。1 年間の留学者 25 名に実施した IDI のスコアは、1 セメスター目終了時では 28%、2 セメスター目終了時では 40% の伸びがみられ、文化的理解や、異文化コミュニケーションのスコアは特に 2 セメスター目で伸びていた。留学期間が長いほど、語学・異文化センシティブティともに合計としては大きな伸びがみられたが、語学については 1 セメスター目の上昇率が高く、異文化センシティブティについては 2 セメスター目の上昇率が高いという結果になった。本研究は、これまでは自己評価に基づくアセスメントなどが主流であった留学のインパクト調査において、語学面と文化面における既存のアセスメントツールを用いて検証をした初期の調査として頻繁に引用されている。

- 2-2. Rexeisen, R. J. (2012). Study abroad and the boomerang effect: The end is only the beginning. *Frontiers: The Interdisciplinary Journal of Study Abroad*, 22, 166–181.

本稿では、米国の某大学から英国に留学した 139 名の学部生に対して、留学効果としての異文化センシティブティの変化を検証するため、IDI を用いて、留学開始 4 ヶ月前、留学プログラム終了 1 週間前、留学終了後 4 ヶ月経過時点の 3 回測定し、そのスコアの違いを比較した。その結果、参加者の異文化センシティブティは、留学前に比べ、留学プログラム終了 1 週間前の時点で大きく向上したが、留学帰国後 4 ヶ月の時点では、そのスコアは下がってしまうということが確認され、著者はそれを「ブーメラン効果」と表現した。留学後に介入や教育機会などがない限り、留学によって得られた異文化センシティブティの向上効果が持続しないということが示された。留学帰国後に留学効果として得られた異文化間センシティブティが減少していく期間と、留学の長期的なインパクトの関連については、さらなる研究が必要であるとしている。

- 2-3. Doyle, D. (2009). Holistic assessment and the study abroad experience. *Frontiers: The Interdisciplinary Journal of Study Abroad*, 18, 143–156.

本稿では、留学経験のアウトカムを、GPI というアセスメントツールを用いて、学生発達の視点から包括的に検証したものである。GPI は (1) 認識面 (何が正しい知識で、何を知るべきか)、(2) 個人面 (個人の価値観と自己のアイデンティティーを、その人間性に統合していくこと)、(3) 対人面 (異なった社会的背景や習慣を持つ人との交流志向性、他者の受け入れ・関係作りの快適さ) の3つの面から検証するツールである。本稿では、GPI というアセスメントツールの複数回の実施に加え、インタビューも複数回実施しており、GPI での変化を、学生のインタビュー結果を通じて、より深く探究している点が特徴的である。調査の結果、GPI のポストテストのスコアは肯定的な方向に増加していたことから、留学は学生の発達に影響を与えることが確認され、その発達を裏付けるインタビュー結果も提示されていた。ただし、本稿では Central College から 2007-2008 年に留学した学生全員に対して GPI を実施していたと記載されていたが、その学生数、留学期間、留学先などが厳密に述べられておらず、インタビューの実施人数も不明である。

- 2-4. Braskamp, L. A., Braskamp, D. C., & Merrill, K. (2009). Assessing progress in global learning and development of students with education abroad experiences. *Frontiers: The Interdisciplinary Journal of Study Abroad*, 18, 101-118.

本稿では、留学のアウトカム研究において、大学生としての発達やグローバルラーニングという枠組みで留学の効果が検証されて来ていなかった点に着目し、King や Baxter-Magolda のセルフオーサーシップという概念を参照しつつ、GPI (Global Perspective Inventory) というアセスメントツールを用いて、学生の1学期間の留学前後の GPI スコアの比較を行った。調査に参加したのは、米国5大学の計245名であった。GPI では、主要な3つのドメインに対して、2つずつのサブスケールが存在する。それらは (1) 認識面：知ること (発達)、知識 (獲得)、(2) 個人の内面：責任 (発達)、感情 (獲得)、(3) 対人面：社会責任 (発達)、社会交流 (獲得) である。これら6つのスケールのうち、知ること (発達) 以外の5つのスケールにおいて、留学の前後で、統計的に有意な差が留学参加者にみられた。一般的に、留学への参加は、自信を高め、将来の方向性を明らかにするのに役に立ち、セルフオーサーシップに向けた発達に役立っていると言える。また、留学経験は、文化の違いを理解し分析するという知

識面では肯定的な影響をもたらすが、得られた知識の活用、物事の知り方、判断の仕方という点では、留学戦後で発達があまりみられておらず、そのような発達を促す支援を実施することが今後の課題であると言える。

- 2-5. Anderson, P. H., & Lawton, L. (2011). Intercultural development: Study abroad vs. on-campus study. *Frontiers: The Interdisciplinary Journal of Study Abroad*, 21, 86–108.

本稿では、米国の某大学に所属する学生の留学を通じた異文化センシティブティの変化について検証した。イギリスに1学期間留学した39名、ビジネスに関する授業を米国で受講した41名（留学未経験者）、コミュニケーション理論に関する授業を米国で受講した39名（留学未経験者）の3つのグループに対し、セメスターの初めと終わりに、IDIとGPIを実施した。結果として、IDIとGPIの全体的なスコアは、プレテストでは、すべてのグループで有意差がなかったが、ポストテストでは、留学に参加した学生グループのスコアが高かった。26のサブスケールのうち、3つのサブスケールでは、留学未経験者の方が学期後のスコアが高かったが、それらは統計的に有意な差は見られず、統計的に有意な差が見られたサブスケールは全て留学経験者の方が高いものだった。さらに、IDIとGPIについては、スコアの相関がみられなかったため、この二つのアセスメントツールは交換可能なものではなく、異なった側面に関してのアセスメントを行っているということも確認された。

- 2-6. Douglas, Ceasar; Jones-Rikkens, Catherine G. (2001). Study abroad programs and American student worldmindedness. *Journal of Teaching in International Business*, 13 (1), 55-66.

本稿では、米国の中西部の州立大学から、大学提供の留学プログラムによってイギリス（29名）、ドイツ（9名）、中国（8名）、コスタリカ（13名）のいずれかに留学した学部生（2-4年生）と、海外旅行の経験のない学生（対照群）（61名）の計120名に対して、Sampson & Smith (1957) の Worldmindedness Scale を用いて、2つの仮説について検証した。その結果、1つ目の仮説「留学プログラムへの参加者は、未経験者よりワールドマインディドネスのスコアが高い」

については、留学参加者の方が、対照群よりもワールドマインディドネスのスコアの平均が高く、カイ 2 乗係数を用いた判別関数分析において、統計的に有意な差が認められたことにより、確認された。さらに、2 つ目の仮説「米国と留学先の国の文化の違いが大きいほど、留学後のワールドマインディドネススコアの伸びが大きい」については、ドイツと中国への留学者のスコアと他の地域への留学者のスコアには、統計的に有意な差は認められなかったが、イギリスとコスタリカへの留学者のスコア間に、統計的に有意な差が見られたことから、2 つ目の仮説の一部は支持された。ホフステードによると、イギリスとコスタリカは、文化の 4 つの側面のうち 3 つで相反する特徴を持っており、文化差が著しいとしている。この結果から、アメリカ人の学生が留学に参加することは、ワールドマインディドネスを高める上で意義があるが、留学先の検証も重要であるということがわかる。

- 2-7. Kehl, K., & Morris, J. (2008). Differences in global-mindedness between short-term and semester-long study abroad participants at selected private universities. *Frontiers: The Interdisciplinary Journal of Study Abroad*, 15, 67–79.

本稿では、Global-mindedness Scale を用いて、3 つの大学に所属する学生のうち、8 週間以内の短期留学参加者（144 名）、1 セメスター留学参加者（193 名）、留学未経験者の対照群（183 名）の計 520 名から回答を得て、3 つのグループのスコアを比較した。その結果、8 週間以内の留学プログラム参加者と留学未経験者については、スコアに有意な差が見られなかった。1 セメスター留学参加者と留学未経験者では、統計的に有意な差が見られ、1 セメスターの留学をした方が Global-mindedness Scale が高かった。また、8 週間以内の留学経験者と 1 セメスター留学の経験者では、1 セメスターの留学をした方が Global-mindedness Scale のスコアが有意に高かった。この結果から、Global-mindedness Scale を高めるためには、8 週間という短期ではなく、1 セメスターの留学を推奨するべきであるとしている。

- 2-8. Rexeisen, R. J., & Al-Khatib, J. (2009). Assurance of Learning and Study Abroad: A Case Study. *Journal of Teaching in International Business*, 20(3), 192–207.

本稿では、ビジネス専攻のプログラムにおいて、海外留学が異文化センシティブティの発達、環境に対する態度、倫理的な判断能力、物質主義の志向に関連があるかを、複数のアセスメントツールを用いて分析したものである。アセスメントプロセスの枠組みとして Advance Collegiate Schools of Business International (AACSB) AOL guidelines (2007, 2008)を用いた。AACSB のアセスメントのルーブリックとして使用したアセスメントツールは、Intercultural Development Inventory (IDI)、New Ecological Paradigm (NEP2)、ethics position questionnaire (EPQ)、materialism scale の4つであった。留学の前後に EPQ と materialism scale を 60 名に対して実施し、その半数ずつの学生に IDI と NEP2 の一方をランダムに実施した。その結果、海外留学は異文化センシティブティと環境保護に関する態度において肯定的な影響を与えることが明らかになった。一方、海外留学が倫理的な判断能力や物質主義志向に与える影響は複雑であり、今回の調査では、これらの領域に与える留学の影響を明らかにすることは難しいとの結論に至った。

2-9. Rexeisen, R. J. (2013). The impact of study abroad on the development of pro-environmental attitudes. *The International Journal of Sustainability Education*, 9(1), 7-19.

本稿では、英国の大学に1学期間留学をした米国の某大学の学生86名に対して、留学前、留学終了時、留学後4週間の時点で、The New Environmental Paradigm (NEP) (Dunlap et al., 1978)というアセスメントツールを用いて、環境に関する5つの領域についての変化を検証した。その結果、学生は留学から戻ってきた後も、環境に関する学びが促進されたことが確認された。ただし、環境に関する要因の一つのスケールである、「Limit」については留学後にスコア低下が見られ、「Exemptionalism」スケールについては、一度留学でスコアが上昇したものの、4ヶ月後のフォローアップでは留学前のレベルに戻ってしまった。また、全体のスコアの中で男女の差があることも確認された。そのため、留学帰国後に起きる態度の変化については、さらなる研究が必要であるとしている。

- 2-10. Tarrant, M. A., Rubin, D. L., & Stoner, L. (2014). The added value of study abroad fostering a global citizenry. *Journal of Studies in International Education*, 18(2), 141–161.

本稿は、短期留学のアウトカムとしてのグローバル市民性の育成に焦点を当てている。対照群として、環境の持続可能性に関するコースの受講の有無、留学の有無による4つの学生のグループに対し、グローバル市民に関する3つの尺度（環境市民、公的な環境政策に対する支持、生態系に配慮した消費行動）を用いて、プレ・ポストテストを実施した。その結果、環境市民に関する尺度と生態系に配慮した消費行動に関する2つの尺度において、持続可能性に関するコースを留学という形式で受講した学生のグループが、統計的に有意なスコアの上昇を示した。この結果は、ただ単に留学をするだけでは、グローバル市民性の向上にはつながらないが、留学中に環境に関するコースを受講することによって、グローバル市民性のスコアを上昇させたと分析できる。この結果から、留学という機会を通じたグローバル市民性を効果的に向上させるために、環境の持続可能性に関するコースを取り入れた留学プログラムのデザインや、ファシリテーターとしての教員の研修に力をいれることが重要であると言える。